

つても、ソヴェートの反感を買ふことは絶対に避けなければならない。従つて新支那中央政府が成立したについても甚だ氣乗薄である。

獨逸でさへもその通りだから、日本の東亞新秩序の建設に對して、第三國の協力を求めることは絶対に不可能であると考へなければならぬ。かういつたやうに、非常に長い年月のかかる、しかも第三國の敵性の中に遂行されなければならない新東亞建設の事業であるとする、それでは何故に日本はさういふ困難な仕事を飽くまでも遂行しなければならないのであるか、できるだけ早く支那事變を打切つて、平和を樂しみたいといふことを考へるのは、一應もつとも國民の希望であると思ふが、さやうに簡単に打切り得ないところに支那事變の性格がある。

今となつては日本が大陸から手を引くことは絶対に不可能である。敢へて日本が事を好んでかういふ難局に立つたのではなくして、かういふ風になるのが日支兩民族の宿命であると、私は考へてゐる。何故にそれが宿命であるかといふと、今回の事變勃發の動機がどこにあるにもせよ、日本民族の大きな發展力から考へて、將來どうしても亞細亞大陸に發展を遂げなければならないのが民族的の必要性である。

それから今日の世界情勢からすると世界經濟がブロック化することは、どうしても避けること

のできない趨勢にある。従つて日本としては今までの帝國の版圖内に跼蹐することなく、滿洲國及び支那と協力提携して、力強い東亞經濟ブロックを形成しなければならない。さういふ國家的の必要性がある。そこから今次事變の宿命觀が生れるのであつて、この故に新東亞建設のためには、日本の全力を擧げてこれが完遂に邁進しなければならないことが結論づけられるのである。

新東亞の建設はあらゆる意味において日本民族に取つて歴史的の大事業である。従つてこれが完遂のためには國家總力戰體制を整へ、國民總動員によつてこれにあたらなければならない。しかもその國民總動員は物質力と精神力との動員でなければならない。日本の所有する物質力と精神力とを遺憾なく發揮し得るやうな總動員體制の整備が必要とされるのはこのためである。それでは日本が事變處理の目標とする新東亞建設の具體原則は何であるかといふと、これは所謂近衛聲明に明記されてゐる通り、善隣友好、共同防共、經濟提携、この三つである。

第一の善隣友好については、東亞各國の間に國際正義を確立して、日支親善、日支共存共榮の原則を確立することである。第二の共同防共については、國防力の徹底的充實を圖り、國防の獨立を確保し、赤化勢力を防遏することである。第三の經濟提携については、日支の提携によつて、東亞ブロックにおける自給經濟の確立を圖ることである。これが新東亞建設の具體的の目標とし

て示されてゐるのである。

そこに新東亞建設に對する技術の使命といふ問題が生れる。第一に、國防と技術との關係を考へて見ると、近代の戦争は極度に科學化され、機械化された。そのために、今日の軍隊は強健な肉體力と旺盛な精神力とを有するだけでは不十分であつて、これに優秀な科學的の裝備を加へなければ、強力な軍隊といふことができなくなつた。

その實例は近年におけるエチオピア戦争であるとか、或は最近のポーランド戦争であるとか、或はフィンランドの戦争などにこれを見出すことができる。例へばポーランド戦争においては、獨逸側は非常に電氣通信設備が完備してゐた。ために軍隊を動かすにあつて、時期を失せず有効適切な指揮命令を徹底させることができた。それが獨逸の大勝の原因のひとつであるといふ傳へられてゐる。それからフィンランド戦争においては、ソヴェート側の機械化部隊がフィンランド側のそれに較べて非常に優勢であつたといふことが、フィンランド敗北の重大な原因であるとも聞かせる。

第二に、經濟と技術との關係について考へると、この兩者は極めて密接な關係において結ばれてゐて、技術の向上と經濟の進展との間には密接不離の因果關係がある。經濟が今日の如く進展

したのは、その原因が専ら技術の飛躍的向上にある。例へば今日の資本主義經濟はどういふ徑路を辿つて發達して來たかといふと、機械の發明による大量生産が資本主義經濟の特色であるが、その大量生産をするために機械設備をしなければならぬ。機械設備をするために多額の資本を蓄積しなければならぬといふことが、今日の資本主義經濟を發達せしめた有力な原因であり、理由であるが、技術が近年において機械の發明を中心として劃期的の躍進を遂げたことが、資本主義經濟を同じく飛躍的に發達させたといふ結果になつてゐる。

日支の經濟合作、經濟提携といふ問題についても、支那はその豊富な天然資源を提供する。日本はその優秀な技術を提供する。それで始めて日支の經濟合作が最も合理的に實現される。それによつて始めて日支兩國の共同の利益を建設することができる。そこに日支經濟提携の理論が成立すると、私はかういふ風に考へてゐる。

特に大陸の開發については、新に地下資源を採掘するにしても、在來資源の増産を圖るにしても、或はその品質を改良するにしても、つぎにそれらの物資を運搬するにしても、それら各方面について極めて廣汎な分野に互る技術の應用がなされなければならぬ。さらに進んで日滿支三國の東亞經濟ブロックにおける不足資源は、優秀な技術の活用によつて合成品を作り、代用品を

作ることによつて補填しなければならぬ。かやうに考へると、國防の觀點からしても、經濟の觀點からしても、新東亞の建設について技術の帯びる使命がいかにも重大だといふことが諒解される。

五

今日東亞ブロックの資源的地位を考へて見ると、世界において最も豊富な資源をもつてゐるブロックは米國である。米國は世界における重要資源の約五十パーセントを獨占してゐるといはれ、非常に豊富な資源をもつたブロックである。つぎはソヴェートのブロック、それから英帝國のブロック、東亞ブロックはこれら三つのブロックにつぐ、天然資源の豊富なブロックである。即ち世界における第四番目の豊富な資源をもつたブロックである。

例へば鐵、石炭、タングステン、その他の各種礦物、鹽、棉花、羊毛といふやうな種目について見ても、相當豊富な資源をもつてゐる。現在の状態ではまだまだ足りないものがあり、例へば棉花、羊毛の如きは東亞ブロックだけでは今日なほ自給自足することができないが、これに技術的の施策を加へるならばその大部分を自給し得るところまで、漕付け得ると考へられる。その中

でただひとつ大きな不足を感じるのは石油資源である。今までのところでは支那大陸に豊富な石油資源があるとは豫想できない。ただし天然石油が不足する場合には、頁岩油であるとか或は石炭液化であるとか、その他の方法によつて液體燃料の問題を解決することもできる。

大陸の天然資源を開發するについては、日本の技術の最も精密な部分を支那に進出させて、その技術に最も優秀な効果を發揮させることが絶対不可欠の條件である。日本の工業力の現状からいふと、支那事變によつて、非常に大きな飛躍を遂げ、ある部分については可なり高度の増強が行はれたが、これを諸外國に較べると、まだ非常に貧弱であると考へなければならぬ。

例へば歐米各國の石炭消費量を取つて見ると、米國は國內において三億五千萬噸の石炭を消費してゐる。それから英國は約二億噸、獨逸は約一億八千萬噸、かういふやうな大量の石炭を消費してゐるのであるが、日滿支ブロックの範圍における石炭消費量は漸く×億噸に達するか、達しない状態である。これでは工業國としてとも英國や獨逸と肩を並べることができない。かりに×億噸の石炭を消費するとなると、將來×億噸の増産をしなければならぬ。これは實に容易ならざる問題であるが、しかもその殆ど全部は滿洲及び支那の石炭に期待しなければならぬ。それから鋼の生産量についていふと、昭和十四年度において獨逸は二千萬噸以上の鋼を生産し

てゐる。將來世界の強國としての日本も、鋼の生産量は×千萬噸以上を確保しなければならぬといはれてゐるが、遠い將來は暫く別としても、數年後といふやうな近い將來を目標として、少くとも×千萬噸の鋼の生産量をもたなければならぬといふことは、斷言してよいと思ふ。

ところが現在のわが國の鋼の生産量はどれくらゐかといふと、詳しい數字をお話することは憚るが、×千萬噸目標に對しても、僅にその半分を充たし得るに過ぎない、といふ貧弱な状態である。これらの點から考へて見ても、日本の工業力を増強するためには、これはひとり技術者だけの責任でなく、日本國民として異常な努力をしなければならぬのである。

六

特に日本が新東亞建設のための協力者として選んでゐるところの——選んでゐるといふよりは選ばなければならぬところの——漢民族は今日非常な勃興期にあると考へなければならぬ。蔣介石が提唱した新生活運動の實踐によつて、今日の支那はもはや昔の支那ではない。例へば科學の振興であるとか、國民體位の向上であるとか、國民精神の作興であるとか、或は民族意識の昂揚であるとか、最近の支那は全く面目を一新した感がある。

蔣介石の中央軍の訓練は日本の軍隊に比して、決して劣らないだけの猛訓練を加へてゐる。また國民體位の向上の結果として、今日の中央軍は昔のやうに背の高いひよろひよろした兵隊と、背の低いすんぐりした兵隊とが、肩を並べてゐるといふやうな軍隊ではなく、非常に粒が揃つて來た。それからまた青島あたりの中學校の教練や、體操などを見ても、支那人の中學校の教練の方が青島における日本人の中學校の教練よりも、遙に秩序が整然としてゐる。かういふやうなことでさへいはれてゐる。それらの點から見ても決して日本人は今日の漢民族を侮つてはならない。

私は昭和十年に支那に旅行したことがある。そのときに私の受けた印象を一言にしていへば、青年支那、つまり支那が若々しい力を以て立ち上つて來たと云ふ感じである。そのときの國民政府の部長（大臣）、次長、司令（局長）といったやうな要人に會つて見ても、いづれも年齢が若い。さういふ點から青年支那といふ印象を受けたのであるが、その勃興期にある漢民族と協力提携して、新東亞の建設にあたらなければならぬとすると、日本人にもそれだけの確乎たる覺悟が必要である。

特に支那には昔から人間政治——さういふ言葉を使つてゐる人があるが、人間政治が發達してゐる。支那には昔から法律政治もなく、機構政治もないが、機構によらず、法律によらず、人間

による政治が完全に行はれて来た。かういふ點が支那の民族性を研究する上において、しかもそれが日本の民族性と著しく違つてゐるといふ意味において、特に注意しなければならない點であると思ふ。

即ち支那人は百の理論よりも、ひとつの實踐を重んずる民族である。これをわれわれは深く認識しなければならない。従つて日支經濟合作、經濟提携の問題にしても、日本と提携することが支那のために經濟的に利益である。英國、米國、ソヴェート、そのほかのどの國と提携するよりも、日本と提携するのが有利であるといふことを、實物教育によつて支那人に會得させる必要がある。即ち眼に物を見せなければならぬ。眼に物を見せるといふと、日本では酷い目に合せるといふ意味に聞えるが、さういふ意味でなしに、日支提携の實利、實益を明確に示さなければならぬ。

その點からいふと今日支那に最も缺乏してゐて、しかも支那人が最も切實に要求してゐるものを提供するにかぎる。それは何であるかといふと、取りも直さず自然科学であり、自然科学に立脚する技術である。日本がまた自信をもつて提供し得るものも自然科学であり、技術でなければならぬ。その意味においても日本の技術の使命が、特に重大であることを痛感する。今や日本

の技術は量的の意味においても、また質的の意味においても總動員されなければならない。今日のはさういふ時期に際會してゐるのである。

即ち技術には普遍妥當な性格も全くないわけではないが、少くとも今日の情勢においては、その國家的、民族的な性格が強化されなければならない。それが大きくクローズ・アップされた技術の近代的性格でなければならないと私は考へる。従つてわれわれはまづ日本獨特の優秀な技術を創造しなければならない。日本獨特の技術を育成することが、ひとり技術者ばかりでなく、國家として、また國民としての當面の義務であると考へる。

七

しかるに日本技術の現状を考へると、日本が歐米諸國に較べて自然科学及び近代技術の方面において非常に立ち遅れた結果として、まだまだ歐米を凌駕するだけの科學技術は建設されてゐない。歐米の技術を模倣して漸く今日の狀態にまで達した。ただし今後は日本獨特の技術を哺育、造成するために、技術獨創の時代に進展しなければならない。しからば日本の技術を向上發達させるために、果していかなる方策を執らなければならないか。それにはいろいろの方策があり得

ると思ふ。

第一に、技術者各自の獻身的の努力が何を措いても要請されなければならないのであるが、しかし決してそれだけで日本の技術が向上するわけではない。技術は技術者だけに委せて置けといふやうな、無關心な態度では日本の技術は進歩しない。即ち第二に、技術に對して國民が深い理解と正しい認識とをもつことが必要だ。それから第三に、國家が技術の進歩發達のために充分の保護獎勵の道を講ずることも必要である。第四に、その觀點に立つて日本の技術教育の徹底的刷新を圖ることも必要である。これらさまざまの方策を打つて一丸として、國家、國民、技術者、この三位一體の綜合的努力によつて、一日も速に技術日本の獨立を完成しなければならぬ。即ちそのために國家的、國民的努力を集中しなければならぬのである。

去る四月四日に、目下池の端で開催されてゐる『輝く技術展覽會』に、長くも總裁官であらせられる東久邇宮殿下が御臺臨になつた。そのとき私どもが御案内を申上げて、宮殿下からいろいろ御下問を賜つた。その中で非常に恐懼感激したことは、あの博覽會に出品された日本の技術の成果について、これを外國と比較してどういふ状態にあるかといふことを、非常に詳しく御下問になつたことである。

即ち日本の農業、畜産業は外國に較べて優つてゐるか、劣つてゐるか。また工業についていへば、どの部分が外國に優つてゐて、どの部分が外國に劣つてゐるか。この機械は日本で製造されたとしても、その發明は日本のものか、外國のものか。それからテレヰキジンを御覽になつて、日本のテレヰキジンの進歩の段階は、外國に較べてどういふ位置にあるかといふことも御下問があつた。

また無水アルコールについて、千葉縣では無水アルコールを製造するために芋を盛んに作つてゐる。それから臺灣では砂糖を絞つた滓から無水アルコールを採つてゐる筈だ。宮殿下が技術方面の専門事項について、かういふ風に非常に深い御關心と御知識とを備へて居られるといふことは、誠に恐懼感激に堪へない次第である。

甚だ畏れ多い言葉であるが、全國民を擧げて技術に對するかくの如き深い理解と、かくの如き正しい認識とをもつ状態になつたならば、それが技術の向上發達にどれだけ貢獻するか知れないといふことを、私そのときにつくづく感じた次第である。宮殿下の長い思召を拜するにつけても國家と國民とを擧げて輝かしい日本技術の育成、發達のために國家的、國民的努力を集中することに、國策を指向しなければならぬことを痛感するのである。電氣協會に關係して居られる

かたがたは、その點について非常に有力な發言權をもつて居られると思ふので、特にこの點を強調する次第である。幸にして平生私どもの提唱してゐる技術報國精神に共鳴下さるならば、希くは日本技術の向上發達のために、熱烈な協力と支援とを與へられんことを希望してやまない。

(昭和十五年四月)

興亞日本の技術者に望む

最近の私の讀んだ書物に『東亞國防國家建設論』と『支那再建の指導精神』とがある。前者は神田孝一氏の著、後者は田邊元博士ほか三十數氏の、この問題に對する意見を蒐めたものである。神田氏は所謂世界舊秩序の代表的形態たる歐米各國の帝國主義侵略體制に對するアンチ・テーゼとしてつぎの三つの新秩序運動を擧げてゐる。

その第一は資本主義に反對して、共產主義による世界赤化を目標とするソ聯の新秩序運動、第二は全體主義指導原理の下に自國民族を中心とする秩序の再建を主張する獨・伊の新秩序運動、第三は八紘一宇の世界觀に基き、萬邦協和の世界一家體制を具現せんとする日本の新秩序運動、この三つである。

わが國の標榜する東亞新秩序の建設は、實に世界新秩序建設の前提たるべきものである。わが國は皇祖肇國の大精神に照らし、かかる新秩序建設を使命として建國された世界唯一の道義國家

であることが明白であり、従つてわが國が世界新秩序の建設に邁進することは、即ちわが民族の胸奥に内在する皇道的至上命令でなければならぬ。國防とは消極的には國體の擁護であり、國策の防衛であるが、積極的には國體の大義發揚であり、國策の遂行である。以上が東亞國防國家建設論の基礎原理である。つぎに『支那再建の指導精神』については、諸説必ずしも一致せず、かつその詳細な内容を紹介することは、編輯者の嚴禁するところであるが、支那の再建が東亞新秩序建設の理念に従つて指導されなければならないのは、曩の近衛聲明に徴しても極めて明瞭である。

東亞の共同防衛、帝國主義的支配機構の廢絶、アジア的協同體制の樹立と新東方文化の昂揚を以て、その根本性格とする東亞新秩序建設は、東亞兩民族の醇化統一による福利増進と共榮確保とを目標とする。従つて東亞新秩序と東亞國防國家とは一にして二ならず、征服精神、侵略精神を含まず、八紘一字の世界觀に立脚して『しらす』ことを以て本質とする、わが國體の大義を恢弘することを指導原理とする。東亞國防國家は實に日滿支善隣連環の東亞新秩序の上に構成せられなければならない。この故に東亞新秩序を目標とする經濟ブロック建設と文化建設とは、アジア的協同體制における自主自給經濟の確立と、東洋古來の精神文化と西洋近代の物質文化とを融

合した東亞の新文化の創造を目標としなければならない。それが東亞國防國家の緊急の要請だからである。

第一の問題である東亞經濟ブロックにおける自主自給經濟の確立については、東亞經濟ブロックは米國・ソ聯・英帝國に亞いで、世界第四位の豊富な天然資源に恵まれてゐる。獨・佛・伊の如きは遠くこれに及ばない。固より獨逸のイーマーが擧げた二十二種の重要國防資源が、東亞經濟ブロックに全部備はつてゐるのではなく、棉花、羊毛、石油、ゴム、銅、ニッケル、鉛、その他の、所謂戰略的原料の範疇に屬するものが決して少くはない。

しかしながらこの程度の豊富な資源をもちながら、なほかつ自主自給經濟を確立し得ないとしたならば、それは民族の無氣力と無能力とを表明するものだ。米國の如きでさへ二十數種の戰略的原料を指定してゐるではないか。

問題は民族の知能、特に技術的知能いかに懸る。支那が從來豊富な天然資源を擁しながら、これを開發し得なかつたのは、そのために必要な技術を缺いたためである。實在の天然資源を開發するについてさへさうである。まして所謂戰略的原料を補給するための、代用資源の創造合成にいたつては、専ら技術の獨創に俟たなければならない。實に優秀な技術のみが『持たざる國』

を『持てる國』たらしめる偉力を獨占し得る。

この故に技術は今や最重要の資源として、獨占されようとする世界的趨勢にあり、技術の解放については今後全くこれを期待しがたい。この意味において新東亞の經濟建設にあたつて、最も緊要なものは技術であり、東亞ブロックにおける自給經濟の確立にあたつて、若し不足するものありとすれば、それはまさに技術であると斷言しても誤ではない。

さらに第二の問題である東亞新文化の創造にあたつても、世界に誇るに足る東亞の物質文化を建設するためには、最も優秀なる技術的獨創に俟たなければならぬ。即ち興亞の大業は産業建設の方面においても、文化建設の方面においても、最も卓越せる技術を必要とし、しかもその技術は少くとも現在の情勢においては、専ら日本から提供されなければならないのである。この重大使命をもつ日本の技術は、果してよくその重責を完うし得るであらうか。

わが國の技術は十九世紀の中葉以後、歐米各國から輸入され攝取され、技術界の先輩の異常な努力によつて、漸く今日の技術日本が建設されたのである。しかしながらわが國の技術は今日完全に歐米の技術から獨立してゐるであらうか。わが國の工業は今日完全に日本技術の上に立脚してゐるであらうか。遺憾ながら私はこれを肯定するだけの勇氣をもたない。刻下の國際情勢にお

いてわが國が東亞新秩序建設の推進力となり指導力となつて、この曠古の聖業を完遂するためには、何を措いても技術の進歩發達を圖り、その獨立を確保することが國家的の緊急問題でなければならぬ。

わが國の技術が歐米を凌駕するだけの向上發達を遂げないのは何故であるか。それは歴史が新しいことにも一半の原因はあるが、他の一半の原因は國民と技術者との共同の責任がある。

獨逸醫學界の碩學ロバート・コッホが埃及や印度に遠征して、コレラの病原菌を發見したときに、時のカイザー・ウヰルヘルム二世は、恰も凱旋將軍を迎へる禮を以て、コッホ博士の伯林歸還を迎へたといふことである。科學や技術に對する理解認識と、尊敬愛好とが、かくの如く深ければこそ、獨逸の科學や技術が世界的の發達を遂げたのである。單に技術を利用し、技術者を使役するといふやうな根性が人心を支配するかぎり、いかに技術獎勵を策したところで、技術は進歩發達するものではない。

この意味において私はわが國の技術的水準が低いのは國民の責任であり、これを以て技術者を責めるのは、責任轉嫁であるとして極言したことがあるが、ただしそれは決して技術者の責任解除を意味しない。

われわれの先輩は多年技術に對する無理解と輕視蔑如との環境の中で、涙の出るやうな刻苦精勵を續けて、今日の技術日本を建設したのである。國民の技術に對する理解、爲政者の技術に對する認識を強化することすらもが、技術者の職責であらねばならないのである。技術に對する國民の尊敬愛好と關心教養とが高まり、かくして技術の向上發達が促進せられるのを、漫然と待つてゐることを許さない今日の時代である。

事務閥と技術閥との對立相剋といつたやうな小乘的な問題に、關心を奪はれることを許さない今日の時代である。かくの如き事務閥と技術閥とは、同時に排撃されなければならない。

東亞新秩序を建設し、東亞國防國家を建設するために必要な技術の總動員は、決して量の問題だけに止まらずして、實に質の問題である。日本技術の向上發達を圖り、その獨立を確保するために、技術報國の信念に徹し、私の所謂『新技術者精神』を把握體得して、輝かしい技術日本を建設することは、まさに日本の技術者の尊い責務でなければならぬ。興亞の聖業を完遂するための技術日本の、責任の重大なるを痛感すると同時に、技術日本の現状の貧弱さに想到するとき、私は全日本の技術者に對して、殉國精進の熱意を要望するの至情に驅られざるを得ないものである。(昭和十五年一月)

隨 想

民族文化の創造

民衆文化の創造

先年滿洲へ何度目かの旅行をしたときのこと、一臺の荷車を牛と馬とが仲よく曳いてゐるのを見て、いかにもちぐはぐな滿人の生活形態を如實に反映してゐるのを、非常に面白く思つた。文化は生活形態の表象であるといはれる。ちぐはぐな文化がちぐはぐな生活形態から生れるのはこのためである。ちぐはぐな文化は民族固有の文化がないか、または固有の文化が完成されない證據だといへる。かういふ見かたをすると、わが國に果して民族固有の文化が完成されてゐるか、どうか危ぶまれて、甚だ心元ない氣がする。あなたがち滿人ばかりを笑ふわけには行かない。文化は靜的なものでなく動的なものだ。人類生活が向上し、發展するからである。ある時代には文化が完成されたやうに見えても、つぎの時代には文化が混沌化する。三歳の子供の身に合つた着物が、四歳の子供には合はなくなるのと同じである。文化に興廢があり、消長があるのもこのためである。

ところでわが國の古代文化は、佛教、儒教、學術のやうな精神文化にしても、建築、繪畫、工藝、工業のやうな物質文化にしても、多くは支那から傳へられたものだ。私の高等學校時代に、同級生に何君といふ支那の留學生がゐた。あるとき一人の生徒が、何君支那にも算盤といふ便利なものがあるかねと尋ねると、何君が澄ました顔で、算盤は昔わが國から日本に傳はつたものですと答へたので、一同大笑ひしたことがある。

漢民族は五千年の古い文化をもつた民族であり、殊に唐代の文化は西洋にまで輝き渡つた優れた文化である。わが國の古代文化が隋、唐、宋の文化に負ふところが極めて大きいのは、歴史の明證するところである。恐らくその當時のわが國の文化といふものは、支那から輸入されたままで、まだ十分に消化されない生硬な、そして随分とちぐはぐなものだつたらうと思ふ。しかし日本民族は外來文化の咀嚼消化に對して、獨特の能力を供へた民族といはなければならない。

佛教や儒教にしても印度や支那では今日殆ど埋滅してしまつて、僅にその形骸を止めるに過ぎないのに、わが國においてひとり立派な發達を遂げ、それがわが國固有の神道と融合して、東洋古代精神文化の核心をなしたのを見ると、それが明かに立證される。奈良朝の文化、平安朝の文化などは、かやうにして創造せられ、當時におけるわが民族文化の完成を見たのである。それは

もはや模倣の文化ではなくして立派な創造の文化だつたのである。

しかるに最近西洋の科學文明、物質文化が輸入されてから以來、わが國には何度目かの文化混沌時代が出現した。西洋近代文化の輸入に對してもわが國は實に敏活迅速だつた。そして今やその咀嚼消化に大童であるが、まだまだ現在のところではわが國獨特の科學文明や、物質文化を生み出す域には到達してゐない。わが國の近代文化が生硬な、ちぐはぐな、雜然たる形態を取つてゐるのはこのためである。

今でもわが國には『上等舶來』などといふ言葉があつて、外國品を優秀視する因襲が傳統されてゐるが、東京の場末の小さな洋服店が Fine Tailor などといふ英語の看板を出して得意になつてゐるかと思ふと、汚ない床屋が Rihatsuten などといふ羅馬字の看板を掲げて喜んでゐるのを見ると、私は心から情なく思ふ。外國では絶對に見られない植民地風景である。巴里の街の看板はひとつ残らず佛蘭西語であり、伯林の街の看板は全部が全部獨逸語であり、羅馬の街の看板は皆伊太利語であるのに、なぜ日本では英語の看板をそれほどにも有がたがるのか。

文章にしても日本文の中に、いや、？を使つて見たり、演説や講演にしても立派に日本語がありながら、無闇に外國語を挿入して見たりするのは、誇をもつた國民の斷じていさぎよしとな

いところである。「洋服に下駄ばき」が、たとひ便利であるとしても、完成された生活形態などは、たうてい考へられないのと同様に、現在の日本文化ほどちぐはぐな、雑然たるものはないやうに私は思ふ。

かつて驛名を横書きにする場合に、左書きにするか、右書きにするかで大問題になつたことがあるが、今でも新聞紙上や電車内や汽車の沿道の廣告などを見ると、右書きもあれば、左書きもあり、それが仲よく隣合せに列んでゐるなどは、一臺の車を牛と馬とで曳く満洲風景を髣髴せしめる。殊に横書きの假名の廣告などは、ちよつとどちらから読んでよいやら分らず、右から読んで見て意味が通じないのを、左から読み直して始めて意味が分るなどといふのは、日本文化の混沌さを暴露してゐて、いかにも情ない。

それだからこそ盟邦獨逸のヒットラーにさへ、日本に固有の文化はない、あるのは歐米輸入の文化だけだ。だから歐米諸國が文化供給の途を絶てば、日本の文化は立ちどころに凋落するほかはない、などと輕蔑されるのである。

わが國が近代文化において歐米諸國に劣つてゐるかぎり、これを輸入し、これを模倣するのはやむを得ない。過去七、八十年わが國は誠に忠實に歐米近代文化を輸入し、模倣して來た。そし

てその『舶來』文化によつて、とにもかくにも今日の強國日本を武装することができたのである。しかし輸入と模倣とだけでは、わが國の民族文化といふものは、いつまでたつても創造されず、完成されない。それはあくまでも孔雀の羽根をつけた鳥である。現在の文化混沌時代は過渡期の異常現象として、やむを得ないとしても、一日も速にその混沌時代から抜け出してわが國の民族文化を完成することが、日本民族としての義務である。

それにはわが國の教育方針が、鵜呑主義、詰込主義、劃一主義から啓發主義、咀嚼主義、天才主義に改められることが、何よりも急務である。わが國の現状は文化模倣の時代から文化創造の時代に進展してもよい時期であり、また進展しなければならない時期である。特にわが國が獨特の優秀な科學文明をもつといふことが、わが國の文化をその植民地的性格から解放するための根本要件と看做されるかぎり、堂々と世界的水準を突破するだけの輝かしい日本科學の建設が、何よりも急務である。その意味において民族科學の創造と、民族文化の創造とを目標として、政治的にも、教育的にも、思想的にも、民族的または國家的努力が集中されなければならないと思ふ。(昭和十五年五月)

民族の誇

先達つて北支へ出張したときの話である。大陸の平野を走る退屈な汽車の中で讀んだ『サンデー毎日』の春季特別號の、濱本浩氏の『哈爾濱の祭』といふ短篇が、ひどく私の興味を惹いた。哈爾濱の祭を見に行つた主人公が、その夜白系露人の美しい娼婦と知合ひになり、明日はホテルへ訪ねてお出で、何でも御馳走をする……といふやうな約束をする。ところが翌日になると、平氣でその約束を反古にして出發しようとするのを、その友人が、それはいけない。たとひ相手が出来ようが出来まいが、こちらはどこまでも約束を守り通してやらう。そして若しも訪ねて来たならば、たとひライスカレーひと皿でもよい、奢つてやつて貰ひたい。日本人の名譽のためだ……さういつて泣かんばかりの眞剣さを以て諫止する。

それがその短篇の狙ひどころだつた。日本人の名譽のために、といふその一句が強く私の胸を打つたのだつた。

民の族誇

今から十五、六年も前の話である。歐羅巴から米國を經由して日本へ歸る途中、サン・フランシスコからシアトル行き夜行列車に乗つたことがある。夕方荷物を赤帽に預けて食事をしに行き、定刻に驛に歸つて列車に乗つて見ると、荷物はちゃんと寢臺にもち込んであるのに、赤帽の姿が見えない。

そのうちに列車は出發してしまつた。たとひ僅ではあつても、赤帽に料金を拂はなかつたことが氣になつて、私はシアトルに着いてからわざわざ赤帽料金を封入した手紙を、サン・フランシスコの驛長あてに出した。そしてこれを何號の赤帽に渡して貰ひたいと、懇ろに頼んでやつた。そのときに私の頭を支配したものは、同じく、日本人の名譽のために、といふ觀念だつたのである。『哈爾濱の祭』を讀んで、はからずもさうした古い記憶が私の頭に甦つて來た。

滿蒙の天地に王道樂土を建設するための根基が五族協和にあるのと同じく、東亞の新秩序は日滿支互助連環を基調としてのみ建設し得る。ただしその五族協和も、互助連環も決して單なる觀念論や、から念佛であつてはならないのだ。その理想が實現されるのも、されないのも、ひとつに日本民族の態度いかに懸つてゐる。これわが國民に國家的性格と國策的行動との要求せられる所以である。

隨

想

しかも國家的性格だとか、國策的行動だとかと、喧しいことをいふ前に、まづわが國民が、偉大なる民族としての強い誇を持ち、そして日本民族の名譽のために行動する、といふことが何よりも大切ではないかと私は思ふ。

わが國民は大陸の先住民族を目して權謀術數、面従腹背の民族とし、悦服せしむべからず、威服せしむべき民族とし、情誼によつて親します、利慾によつてのみ結ばれる民族とする。それは確に彼等の民族性の片鱗を捉へたものであるかも知れない。

だからといつて謀略や、武力や、利害の、いつれのひとつを取上げて見たところで、それが彼等との協和の媒體となるとは、夢にも考へられない。

お互の理解や信賴のない五族協和が砂上の樓閣に等しいのは、『哈爾濱の祭』の作者が作中の一女性をして語らしめてゐる通りである。

その理解や信賴が、單なる觀念論や、から念佛から生れないのは、あまりにも明白だ。空漠たる觀念論や、枝葉末節の方法論の如きは意味をなさない。『旅の恥は掻き捨て』などといふ不名譽な諺は、名譽を貴び責任を重んずる大國民の語彙からは、速に抹殺されなければならない。

名譽を貴び責任を重んずることに、日本民族としての強い誇を感じるこそ、東亞新秩序建

設の要因でなければならないと私は思ふ。(昭和十六年四月)

偉大なる専門家

それが日本民族の特徴のひとつであるかも知れないが、觀念論の横行、理念論の氾濫今日より甚だしきはないと私は思ふ。經濟統制や新體制に關する書物が、玉石混淆、雨後の筍のやうに續々と書肆の店頭に見れるのを見てもその一斑が窺はれると思ふが、あまりにも多くの觀念論や理念論に悩まされてゐるのが、わが政治界、經濟界、その他一般社會の現状ではなからうか。

觀念や理念の確立が、あらゆる實踐行動の先決條件であることについては、私は少しの異論もない。ただし實踐を伴はず、行動を意慾しない觀念や理念は、よし百害はないまでも一利なきものだ。現在のわが國は果してさうした觀念のための觀念に中毒し、理念のための理念に食傷してゐる嫌がないであらうか。

その證據には生産力擴充や、經濟統制が掛聲だけは、いかにも業々しいに拘らず、実績においては甚だ貧弱であり、また今年の夏以來猫も杓子も一齊に新體制を唱へながら、どこにも一向新

體制らしいものが具現されてゐないではないか。

私は近頃の觀念論や理念論の横行氾濫を見て、支那の春秋戰國時代における諸子百家を聯想するのであるが、儒教が朱子學から陽明學に移つて始めて實踐道徳として完成された如く、およそ實踐行動を規範するところのない觀念や理念が、かりそめにも國を濟ひ世を益したためしがあるのを私は知らなう。

實踐を伴はない理念は楫だけあつて、帆もなければ櫓や櫂もなく、また機關もない船のやうなものだ。方向だけは定まつたとしても、船は東西南北いづれの方向にも動かない。

それよりは理念を伴はない、或は誤れる理念の上に立つ實踐の方がまだしも尊いと思ふ。それは恰も楫はないけれども、或は楫が正しい方向にむけられてはゐないけれども、帆があり櫓や櫂があり、或は機關を具へた船のやうなものだからである。楫をつけさへすれば、或は楫を正しい方向にむけさへすれば、船はいつでも目的の方向に進むからである。

近頃しきりに政治力の貧困が叫ばれてゐる。それではその政治力とは果して何であるか。それは觀念でもなければ理念でもない。強烈な信念の上に立つ活潑な實踐力をほかにして、政治力といふものは斷じてあり得ないと私は確信する。

政治力の貧困といふことは、とりも直さず信念の上に立つ実践力の缺乏を意味する。しかもそれはひとり政治界ばかりのことではない。わが國の現状において、あらゆる方面において痛感されるものは、實に實踐力の貧困であると私は思ふ。

申すも長いことではあるが、仁徳天皇は高殿から民家の炊煙乏しきをみそなはせられて、民の貧しきを憂ひさせ給ひ、また 醍醐天皇は寒夜に御衣を脱がせられて、民の寒さを偲ばせ給うたことは、國民の知悉する通りである。そのかぎりなき御仁慈にこそ、實踐躬行の御盛徳を偲び奉るべきではないか。

古來ことあげせぬことを以て誇とするわが國において、觀念論や理念論のみ徒らに横行して、ことあげること頻りなるは、わが國の尊い傳統を汚すの甚だしきものだ。

傳統を汚されることは姑くこれを忍ぶとしても、わが國の國家總力が最高度に昂揚發揮されることを以て最緊急の國家的要請とする現時局下において、ことあげのみ徒らに繁く實踐これに伴はずして、國家總力の發揮に遺憾の點が少くないのは、斷じてこれを忍ぶことができない。

飛行機のやうに上下、左右、立體的に運動する浮體においては是非とも二つの楫が必要であるが、船舶のやうに左右の方向にだけ平面的に運動する浮體においては、必要にして充分なものは

ただひとつの楫である。ふたつ以上の楫は雷にその必要がないばかりでなく、却つて邪魔ものになるのだ。

それと同様の意味において、日本國民に取つて必要なのは、ただひとつの理念であり、またそれで充分だと私は思ふ。そのただひとつの理念とは何かといへば、民族精神を把握し民族精神に生きるといふことである。それがすべての問題を解決する最初の鍵であると同時に、また最後の鍵でなければならぬ。

日本人の責任において實踐し、日本人の名譽のために行動するといふことが、一億國民の生活信条とされるところにこそ、民族指導理念は目標づけらるべきだと思ふ。大陸に進出する同胞國民の行跡について見聞することに、私はそれを痛感してやまない。

こんな話がある。嘗つて東京帝國大學醫學部の某教授が、歐米視察の旅から歸つて大學の教授會でその視察談を試みたときのこと、その視察談の内容があまりにも専門の醫學方面からかけ離れてゐるのに、學者らしい反感を覺えた一人の同僚教授が、

『一體××君の専門は何ですか』

と皮肉たつぷりの質問をしたのに對して、その教授が

『私の専門は日本人である』
と昂然と應酬したといふのである。

想
今でこそ私は自分の専門に閉ぢ籠つてゐられない地位に置かれ、また専門以外の多方面の知識の吸収に懸命の努力をしてゐるつもりであるが、これでも大學では技術の専門教育を受けたものだ。

その大學時代の私の日記にこんなことが書いてある。

『技術者といふのは人のつけた名であり、人といふのは神の與へた名である。自分は技術者になる前に、まづ人にならなければならぬ』

専門的知識は尊い。大言壯語や、美辭麗句からは決して何ものも生れはしない。觀念や理念だけでは世の中は一步といへども動きはしない。専門的知識によつて基礎づけられた實踐行動によつてのみ、社會は組織的に動いて行くのである。専門的知識の尊重されなければならない理由がそこにある。

しかしながら凡百の専門を超越し、かつ凡百の専門を統合するところのものは、實に民族精神であり、民族意識であると私は思ふ。それこそは最も偉大なる専門であらねばならない。この意

味において私の専門は日本人だと豪語し得るものこそ、最も偉大なる専門家であると思ふ。

泥棒は他人のものを盗むことが専門であり、警察官は人を縛ることが専門であるのと同様に、政治家は政權の獲得を専門とし、事業家は金儲けを専門とし、役人は立身出世を専門として、他を顧みるに暇がないかぎり所詮國民精神の昂揚も、國家總力の發揮も、一億一心の協力體制の結成も絶対に期待し得ないであらう。

私は一億國民を擧げて、凡百の専門家たらしめる前に、まづ自分は日本人だといふ強烈な民族意識に生きる偉大なる専門家に仕上げることが、何よりも急務ではないかと思ふ。國民再訓練、官吏再養成の緊急なる所以がそこにある。(昭和十六年五月)

山西雜感

支那の農民

六月十五日の朝北京をたつて、京漢線を南に下つた。京漢線と石太線沿線の鑛業、電業、製鐵業、鐵道、河川、運河などの情況視察の目的である。北支は暑さの絶頂だつた。河北の北部では小麦が實のり、粟粟の花が咲いてゐるのに、河北南部や河南北部では、小麦が刈取られて、粟が蒔かれ、粟粟が實を結んでゐた。

見渡すかぎり廣漠たる耕地は、見事に耕されて、老若男女の農民が平和にその業にいそしんでゐる。畑の中に柳やアカシヤが二、三本繁つてゐるところには必ず井戸があつた。農夫が釣瓶で水を汲上げたり、馬や騾馬が井戸のまはりをひとりぐるぐる廻つて、水車を廻しては水を汲んでゐた。

さうした原始的な方法で汲上げた少量の水で、白く乾ききつた眞夏の畑に灌漑するのである。

北支のやうに雨が少く、地勢の平坦なところでは、溜池や河川を利用する灌漑の便宜に乏しいのは無理からぬところであるが、それにしても漳沱河や漳河のやうに、相當水量の豊富な河もないわけではないのに、灌漑水路などといふものは殆ど見あたらない。

文化は自然を變形し、自然を利用するところに、その起源を置くといはれるが、支那の農民はど自然に従ひ、自然を護つて大地を耕すものを、私はほかに知らない。

京漢線を豊樂鎮まで南下して、漳河に沿つて支線を西に這入り、河南の六河溝炭礦を視察した上で石家莊まで引返し、十八日の朝石太線の貨物列車に乗つて山西に向ふ。特に一行のために有蓋貨車を改造した三等客車が一輛連結された。朝から燻くやうな暑さだつた。

石太線は石家莊、太原間二百四十軒ばかりの鐵道で、河北と山西とを繋ぐ輸送の動脈である。もとは一メートル軌幅の鐵道だつたのを、取敢へず標準軌幅に改造はされたが、勾配や曲線などは従前通りとあつて、輸送能力は甚だ貧弱である。

左右とも硅岩質の秃山で、線路は左右の山頂から襲撃するのに最も便利な、谷底のやうな位置を走る。アカシヤの樹だちに囲まれた、雜石積の清楚な驛の建物は、石家莊骸炭工場、井陘炭礦と一緒に、獨逸資本で開かれた石太鐵道の名残だつた。

黄土の絶壁に横穴を掘つた土民の穴居を見ても、悠久五千年の諦觀に立つて大自然に従ふ支那農民の生活が象徴される。

中原博士の話

井陘炭礦へ行く支線は微水驛から分れる。列車が通るたびに、沿線の子供達が掌をさし出して『進上々々』と列車に向つて喚きたてるのは、京漢線も石太線もかはりがなかつた。

驛のほとりにある韓信、背水の陣の碑は、折からの暑さに辟易して、わざわざ見にゆく元氣もなく、二時頃炭礦に着いて、その日は主として坑外設備を視察したが、その頃私は胃の調子が悪く、それに多少暑さあたりの氣味もあつて、額に苦しい脂汗がにじむのを辛うじて忍んだ。

視察をうち切つてひとり炭礦事務所で休んでみると、夕方衛生室主任の醫學博士中原獅郎氏が訪ねてくれて、暫く話して行つた。中原博士は眞剣な、そして熱情的な青年醫師である。井陘炭礦従業員ばかりではなく、附近三十數箇村の患者に施療して、一日約百五十人の患者を診療し、附近村民の同氏を敬仰すること神の如く、いかなる匪區にも單身立入つて、絶対に身邊の安全を保證されてゐるといふ。

中原氏が炭礦の醫療設備を改善擴充して、日本醫學への信頼を高めると同時に、そこに日支提携、日支合作の強靱な楔を打込みたい、といふやうな抱負を披瀝されるのを聞いて、私は眼の中が熱くなるやうな感激を覺えた。

その旅行中、私はいかにすれば支那人が日本の眞意を諒解し、日本人を徳として心から日支合作を謳歌するやうになるか、といふことを思ひつづけて來た。それには國家的性格、民族的性格をもつ堅實な日本人がひとりでも多く大陸に進出することが何よりも緊要である。この意味において私は黙々として功に誇らず、營々として日支提携の根柢に培ふことを念願する一青年學徒、中原博士の存在を世にも尊いものと思ふ。

中原氏から外國の舊教宣教師團が、二十數年前から正定に開設經營してゐるといふ捨兒收容セトルメントの話聞いたときにも、私は深い感慨を覺えた。民心把握といひ、宣撫安民といひ、所詮は住民の生活安定と、その向上とを要諦とする。それにつけてもわが國民の理解しなければならぬのは、百の理論よりも一の實踐を重んずる支那人の民族性である。

その夜は炭礦事務所に泊つたが、十時を過ぎても室内氣温三十度を下らない暑苦しさに、辛うじて浅い眠を取つた。

翌日はぢりぢりと照りつける炎暑の中を、トラックに乗つて、五軒ばかり離れた正豊炭礦の視察に行き、坑内に這入つて親しく採炭作業などを視察した。井陘にしても、正豊にしても外國資本で開かれた比較的新式の炭礦であるに拘らず、その設備の幼稚なことは日本内地の現状からすると三、四十年も後れてゐる。

支那工員のうち坑内夫は裡工、坑外夫は包工と呼ばれてゐるが、裡工にしても包工にしても、專業の坑夫は少く、大部分は附近村落の農民が、毎朝蟻のやうな行列を作つて、炭礦に通勤するのも珍しかつた。農繁期に出炭量が減るのは、そのためである。

炭礦は皇軍警備隊のほかに、支那人の礦山警備兵に護られてゐた。二十日の早朝礦山を立つて、井陘縣驛に向ふ途中は、支那人の警備兵を載せた二臺のトラックに、前後を護られながらトラックを走らせた。それによつても治安の状態が思ひやられた。

相變らず貨物列車に連結された三等客車に乗つて井陘を立ち、滹沱河の支流桃水河に沿つて遡る。河には流水が豊富で、磧のいたるところに水車場が設けられてゐた。河岸に引上げてある水

車は唐傘をさかさまにしたやうな原始的な、珍しい形をしてゐた。洪水期を過ぎると、それを水車場につけ、石臼を廻して穀物の製粉に利用するのである。

沿線の民家は北支のいたるところで見馴れた土の家ではなく、雜石を石灰やセメントで積上げた石の家である。かうして山西に近づくに從つて、住民の生活の豊かさ、民度の高さが感ぜられた。

別けても娘子關の村落は家並が美しく、河を距てて立派なお寺などが見える。附近の高臺の湧水を集めて桃水河に注ぐ飛瀑に、鯉登の瀧と命名されてゐる。鯉登部隊の山西作戦を記念するものとして、さすがに感慨が深い。

大陸の河川は殆どすべてが濁流である。大陸で育つた日本の子供が繪をかくと、河の水を褐色に塗るといふ話であるが、娘子關の湧水が流れこむ桃水河だけは、見るからに清冽な溪流である。河北、山西の省境をなす長城線を越えると豁然と河谷が開け、山の中腹まで耕地化した山西特有の、石積の段々畑が左右に展開する。山西軍の雜石積の兵舎の廢墟を繞つて、放牧された山羊や綿羊が、無心に草を食つてゐるのを見ても、國破山河在の感傷が深い。

陽泉に着いたのは午後一時であつた。石家莊と太原とのちやうど中間にあたり、海拔六百六十メートルの高地である。陽泉炭礦と製鐵所とは、清朝末期に英國資本で開發されたものであるが、利權の外國に移ることに痛憤蹶起した山西省民が資金を醸出し、保晉公司を設立して買収したもので、それぞれ保晉煤礦、保晉鐵廠の名を以て呼ばれてゐる。晉は山西の異名である。

民國初年利權回收熱が支那に勃興した當時の名残であつて、恰も米國資本で開發された陝西の延長油田が、保陝公司によつて回收されたのと、軌を一にしてゐる。

保晉鐵廠は二十甍高爐が操業中、三十甍高爐が建造中といふ小規模なもので、日本製鐵の七百甍高爐、一千甍高爐などに比べると、まるで玩具のやうなものだが、保晉煤礦の方は坑口が新舊數箇所あり、現にわが國に輸入されてゐる佛印の無煙炭をしのぐ良質炭を、さかんに掘出してゐる。

そのうちで二號坑の坑内を視察したが、通風が悪いために、坑内は三十度を突破する暑さで、文字通り熱汗に塗れた。支那坑夫の能率が低いのは、あながち採炭設備や運炭設備の不完全なせ

いばかりではなく、坑内の暑いことにも大きな原因がある。

その夜若松樓といふ料亭で開かれた宴會の食膳には、刺身や酢のものや海老フライなどが並べられた。どうして日本人はどこまで行つても、疊の上に住んで刺身を食べる生活を清算しきれないのであらうか。陽泉の魚や海老には、さすが無頓着な私も箸を下し兼ねたが、折からの満月に涼しい山西の夜風だけが、何よりも嬉しかつた。このあたりも治安が悪く、ときどき煤礦と鐵廠とを狙つて八路軍が出沒する。近く討伐が行はれるとかで、××部隊の行動が開始されようする慌しさの中を、翌日混合列車で陽泉を立つた。

最急五十五分の一の勾配で、海拔一千七十七メートルの分水嶺を越えようと、黄河の支川汾河の流域で、沿線には土民の穴居が次第に殖えて行つた。初秋を思はせるやうな涼しい山西の高原では小麥も未だ熟せず、罌粟も今が紅白の美しい花盛りだつた。

八時太原北站につく。八時とはいつても、それは日本時間だから戸外はまだ薄明るく、閻錫山の首都、人口十四萬の太原の城壁は、海拔八百メートルの黄土の高原に、薄暮の幽光を浴びて屹立してゐた。

想

明くれば二十二日、折からの細雨を冒して太原博物館を視察した。博物館とはいつても甚だ貧弱なものではあるが、山西モンロー主義を標榜して大學を造り、博物館や圖書館を造り、また西北實業公司を創立してその統制の下に、製鐵、鑄物、火藥、兵器、セメント、煉瓦、窯業、麵粉、紡績、電燈、炭礦、電氣化學、印刷、製紙のやうな、多種多様の工場を經營して來た閻錫山の遠大な抱負に對しては、何がなしに心を惹かれるものがあつた。

太原は正午の氣温十九度といふ涼しさだつた。午後は雨がやんだので、城外の太原鐵廠の視察に出かける。操業中の四十甍高爐、建造中の百二十甍高爐、骸炭爐、平爐、一萬キロ發電所、壓延工場など、小規模ながらも獨逸から輸入した最新式の機械設備が揃つてゐることと、太原撤退に際して閻錫山が、どのひとつの工場も破壊しなかつたこととは、夙に山西省政建設十年計畫を立案した閻の面目を躍如として髣髴せしめた。

××部隊の××參謀長とは、それが初對面だつたが、稀に見る快男兒で、談論風發つきるところを知らず、その怪氣焰がすっかり私を愉快にしてみました。

參謀長は第一次世界大戰後、歐洲駐在を命ぜられたときに、凋落段階にある歐洲などへ可笑しくつて行けるか、といった調子で自分から支那駐在を買つて出たといふほどの、陸軍部内での支那通である。

閻錫山とも親交があり、嘗つては閻の自動車で山西各地を旅行し、今でも轉勤の挨拶状を出すなどといふ話はどこまで本當だか分らないやうな氣がするが、その快氣焰の中でも、速に國論を統一して、國策を確立するのがわが國の急務だとか、山西開發のためには各種産業をコンツェルン式に統制經營することが必要だとか、といったやうな意見には傾聴に値するものが少くなかつた。閻錫山の西北實業公司こそは實に山西コンツェルンを目標としたものであり、それが鑛産、農産、林産等の各種資源に恵まれた山西の、特殊事情から導かれるに最もふさはしい結論だからである。

大陸建設の前途はなほ極めて遼遠である。遙に××參謀長に敬意を表し、その武運長久を祈つてやまない。(昭和十五年十月)

車中雑感

236

近ごろは私も日本内地を汽車で旅行する機会が比較的少くなつたが、それでもたまに汽車旅行をすると、日本人の交通道德の低級なことが、しみじみと痛感される。

先達つても、ひとりの傷痍軍人が、座席を譲ってくれる人がないままに、一晚列車の中にたち通して發病したといふやうな珍事があつた。これなどは同乗客にも罪があるが、鐵道の乗務員にも大きな罪があると思ふ。

第一次世界大戰の直後、私はフランスへ行つたが、パリの地下鐵でも、電車でも、バスでも、必ず片隅の席を四つだけ、傷痍軍人用に指定してあるのを見て、つくづく感心させられたものである。

わが國民道德の極致は忠孝である。そしてそれはわが國民に取つては、道德といふよりはむしろ信仰に近い。その點では世界中のどの國民に比べても、十分に誇り得るだけの美點を備へてゐる。

るに拘らず、日本人の公共心、公共道德といふやうなものは、これはまた世界中のどの大國と比べても、お話にならないほど低級なのを、私は誠に遺憾に思ふ。

たとへば動物園、植物園、公園といふやうな場所へ行つて見ても、日本人ほど新聞紙や辨當の折箱や、果物の皮などで、さうした公共的の場所を汚して平氣である國民はない。

ベルリンの公園で日本人が無造作に、紙切れを往來へ捨てたところ、通りかかったドイツ人がわざわざそれを拾つて、屑籠へ入れてその日本人を赤面させたといふのは、往年私がベルリン滞在中の有名な話題だつた。

私だつて生粹の日本人だ。それも相當に民族意識の強い日本人である。好んで日本人の缺點をあげたくはないが、公共心の甚だ低い反面に、利己心が猛烈に強いといふのが、遺憾ながら日本人の大きな特徴ではないかと私は思ふ。

自分だけよければひとはどうでもよい、といふ我利々々思想である。たとへば戰時統制經濟下の昨今、買溜めや賣惜みが跡を絶たないといふのも、一つには時局下、自分のことは自分で始末をつけようといふ、獨立自治の觀念から出發したところもないとはいへないが、その大部分は利己心の發露と見るべきである。

統制濫りの闇取引にいたつては利己心とよりほかには解釋する途がない。固より人間である以上、利己心は先天的に備はる本能だとは思ふが、公共の利害を目標として、その利己心を抑へ、個人的恣意を自制するところに、國民道德の訓練が必要とされるのである。

私がパリに滞在してゐたときのこと、フランス語の先生だつた中年の婦人が、自國のことながらフランス人のだらしなさを痛罵し、それに比べてドイツ國民の整然たる訓練を賞めそやしてゐたのを私はいまだに覚えてゐる。

今から十六、七年も昔の話であるが、その當時の私の見聞からすれば、なるほどフランス人もだらしないかも知れないが、さらにそれに輪をかけてだらしないのがイタリア人だつた。

汽車の時刻は初發驛から三十分もおくれる。外國人だと見ると出札口で、平氣で釣錢を胡麻化す。首都ローマの中央を流れるチベル河の大理石の石段の上には野糞が垂れ散らしてある。汚い乞食がローマの街路にすら充満してゐる……

その劣等な民族性に、私はほとほと呆れたものである。然るにだ。ムッソリーニが政權を握つてからのファッシスト・イタリアは生れかはずたやうに面目を一新したとある。ローマの街區から乞食と野糞とが影をひそめたとある。汽車は世界一に時刻の正しい鐵道になつたとある。

その話を聞いて私は今さらのやうに、國民性の陶冶が國民の訓練にまつところが、いかに大きいかを痛感したのであつた。わけても率ゐる國民でなくして、率ゐられる國民に取つて大切なものは強制的訓練である。その點ではわが國民はまさに未訓練國民の典型的なものだと私は思ふ。その結果が世界隨一に公共心が弱く、公共道德が低いのである。決して賞めた話ではないのだ。關東大震災の直後、やはり今日のやうに私的生活における自肅自戒が要請されたことがある。それに對して、自分の金で自分が遊ぶのに何の憚るところがあるか、といつたやうな横紙破りの浪費者の横行したことを、私は今でも覚えてゐる。

今日の超非常時においても、統制破りがやたらにふえて、それが待合やデパートや劇場に、押すな、押すな、勢で殺到してゐるのを見ると、やはりかうした協同生活破壊の利己的心理が強烈に働いてゐることを否み得ない。そしてそれが甚だ残念なことには日本人なのである。

日本人の公共道德の低さが、最も露骨に現れるのが交通道德である。そしてそれがどれほど汽車旅行といふ最も普遍的な協同生活を不愉快にするか分らない。

出札口は左から順に、と書いてあつても、いきなり右から飛び込んできて手つ取早く乗車券を手に入れようとして見たり、改札口は一列に、と喧しく注意されても、横から割込む横着者が絶

えなかつたり、全く日本人の交通道徳はゼロだといつてよい。

先達つて東京驛で少年團を、構内の交通整理に動員して、好成绩を挙げたさうであるが、さうした子供達のお世話で、いやでも應でも改札口に一列に並ばせられてゐる日本國民の姿を、想像して見るだけでも、私は情ない氣がするのである。

汽車や電車に乗降する場合の交通道徳として、一降り、二乗り、三發車といったやうな、低能兒教育と間違へられ易い標語が、車中に麗々しく掲げてあるのも、國辱に近い珍風景であるが、わが國では立派な洋服を着て、髭なんか生やしてゐる紳士に、この低能兒教育が必要なのだから情ない。

特に省線電車などでは、人が降りつつある間の僅の隙を狙つて、車内へ飛込まうとするものが少くない。まるで掏摸のやうな敏捷さだ。しかしそれがどれだけ降車客の邪魔になるかわからないのである。

そんなときには私はわざと體あたりで押返してやるのであるが、わが國ではさうした掏摸のやうな座席狙ひが、はしつこいといつて褒められるのだから遣りきれない。

私は米國の横斷鐵道に乗つたときに、洗面所を使つた旅客が、いちいち丁寧にあとを掃除して

ゐるのに、感心もしたし、それを愉快にも思つて、その後日本内地を旅行するときにも、自分だけはその眞似をしてゐる。もつとも今は列車にタオルの備へ附がないので、それができないが、わが國でも今少し車内道徳が向上されることを希望してやまない。

先達つて『富士』に乗つて食堂へ行つて見たら、暑い時期とはいひながら、縮みのシャツとズボン下だけの旅客が、充滿してゐるのに驚かされたが、かやうな無作法者や、食堂車へ外套や帽子を着て來る不心得者は、鐵道の乗務員が嚴重に取締るべきだと思ふ。

そんなことならいくら官僚的に振舞つても少しも差支ない。そこで物は相談だが、鐵道省は東京驛で改札口を通つた旅客の切符を今一度改める、といふやうな不愉快な眞似はやめて、車内道徳の振興にでも今少し力瘤を入れたらどうか。その方がどれだけ國家のためになるか分らないと思ふ。(昭和十五年十月)

上海の一夜

242

南京の中日文化協會で、かねて面識のある鐵道部長の傅式説氏のほか十數名の南京政府の要路のひとびとと、晚餐をともにしたときのこと、傅氏が近いうちに私も上海へ行くから、上海でまたお目にかかりたいと私に話した。

私が南京から飛行機で上海に着いて三、四日滞在してゐるうちに、約束通り傅部長も上海へ来て、佛租界アルペール街の自宅で、晚餐を差上げたいといふ招待状を、私のホテルへ寄越した。それはちやうど私が明日は飛行機で上海を出発するといふ前夜だった。

『ちやうどあなたの送別會になりましたね』

大正七年に東京帝國大學の工學部探礦學科を卒業した傅部長は、流暢な日本語で、その晩そんなことを話した。

上海の租界はいまだにテロ行爲がやまない。傅氏の身邊を氣遣つたためか、その夜の會場はあ

とで同じ佛租界の上海自然科學研究所々長官舎に變更された。矢田同文書院々長、堀内總領事、伊藤滿鐵事務所長、森自然科學研究所長らが同客で、中國側からも五、六名の陪席者があり、打解けた談笑に、楽しい半宵を過ごした。

さうした談笑の間にも、傅部長を始め中國側のひとびとが、いづれも決死の覺悟でなければ、かうして日本側の連中と交驩することはできないのだ、といふことを考へると、私は沈痛な氣持を覺えた。

私が傅式説氏と始めて會つたのは民國二十四年（昭和十年）の秋東洋工業會議の代表として、上海へ来たときだった。

東洋工業會議は學術提携、文化提携を目的として計畫されたものであつたが、第一次上海事變から日なほ淺く、排日抗日意識が中國全土に普及してゐた際ではあり、藍衣社系の妨害運動などもあつて、話がなかなか纏らなかつた。

そのとき會議の開催に斡旋の勞を取られたのが、當時の堀内書記官や傅式説氏だったが、その開催については國民政府行政院内にも反對意見が強く、そのために行政院會議が三回も開かれ、遂に當時の實業部長陳公博氏から、上海市長吳鐵城氏に會議開催に斡旋すべしといふ命令が發せ

随 られて、漸く開會の運びとなつたほどの、因縁つきの催だつた。當時汪兆銘氏は行政院長兼外交
部長だつた。

想 さうした詳しい経緯を、その夜あらためて堀内氏や傅氏から聞いて、私は深い感慨を催したが、
その會議に關聯してつねに思ひ出されるのは、故唐有壬氏である。

唐氏は當時行政院委員兼外交部次長の要職にあり、日本が學術提携、文化提携の手を差伸べて
來たのを拒絶して、會議を不成立に終らしめるやうなことがあつては、中國の國辱だとまで極言
して、會議開催に斡旋したのであつた。

その當時はむろんのこと、今日と雖もこれほどの主張をするについては、よほどの信念が必要
である。といふのは文字通り決死の覺悟がなければ、かうした敢然たる態度は取り得ないのが、
支那の情勢だからである。

唐氏は慶應理財科の出身で、汪部長の下に外交部次長として、親日外交政策の遂行に努力しつ
つあつた四十二歳の青年政治家だつた。

果せるかな、その親日政策が藍衣社系の暗殺團の忌むところとなり、汪氏は十月三十一日、唐
氏は十二月廿五日、兇彈に斃れた。汪氏は長い間の病院生活の後、辛うじて生命を取りとめ、下

野外遊したのは世人の記憶に存するところと思ふが、唐氏は痛ましくも即死だつたのである。

私はそのとき唐氏と南京で會つた。南京では外交部で、汪部長主催の茶會に招待され、夜はま
た首都飯店で外交部、交通部、實業部、南京市政府共同主催の晚餐會に招待されて、その兩度と
も唐氏に會つて談話を交へた。何でも日本留學生の歸國後の模様を質問したのに對して、唐氏は
中國では門閥財産の點で歐米派が樞要な地位を占める傾向があるのは遺憾だ、といふやうなこと
を答へたと記憶する。

さうした記憶につながれてゐるだけに、私は深く唐氏の遭難を悼み、上海や南京に行くことに、
まざまざと唐氏を想ひ起して、哀惜の念を新にするのである。

その唐氏の墓が上海滬西の萬國公墓にあると聞いて、その墓參をしたいと思つてゐた私は、南
京から上海へ着いた十月三日の午後、萬國公墓を訪ねた。

萬國公墓は今度の事變の影響を受けて意外に荒れ果ててゐた。立派な墓がたくさんあるにも拘
らず、墓地は雑草の繁るに任せられ、墓地近く水牛が、吞氣に草を食つてゐた。

その日はどうしても唐氏の墓をさがし出すことができません、私はひどくがっかりしてホテルへ引
上げたが、今度こそはどうしても墓參をしたいといふ念願に驅られて、總領事館で墓の位置を詳

随

しく聞き糺した上で、上海出發の前日、十月六日の午後、再び萬國公墓を訪ねた。

想

今度は直ぐに墓を見つけ出した。唐氏の墓は西洋風の記念碑式に造られ、花崗石で積上げた壁に三個の大理石の扁額が嵌め込まれてゐた。

中央は『顯考唐公有壬墓、中華民國二十五年六月、子又成、滿成、女三成、連成敬立』と刻んだ墓碑銘、右は民國二十四年十二月二十七日に公布された國民政府令、左は汪兆銘氏の撰文になる唐有壬先生墓表である。

それによつて私は唐氏が民國紀元前十八年、湖南省瀏陽に生れたこと、二男、二女を遺して逝かれたこと、國民政府がその遭難を悼んで治喪費三千元を給したことなどを知つたのであつた。

顛覆してゐる花崗石の花立を起して、携へて行つたコスモスと黄菊とを供へ、私は唐氏の墓碑に拜禮し、心からその冥福を祈つた。それは秋晴の暖い午後だつた。

新生國民政府南京還都後の今日、五年前の唐氏の遭難を想ふと、痛惜に堪へないものがあつて、私は墓地を立去るに忍びなかつた。その墓參で私は何となく自分の責任を果し得たやうな安心を覺えると同時に、善事を爲したあとの幸福感に似たやうなものを味ふことができた。

これで明日は安んじて東京へ歸ることができると。その夜の會合で、私が唐有壬氏の墓參をした

ことを話すと堀内總領事も

『それはいいことをした』

と心からの同意を表し、一座はひとしきり先年の東洋工業會議の追憶談に耽つた。

想へば唐氏の遭難は新東亞建設の序曲における尊い犠牲だつた。その後どれほどの犠牲が拂はれたことであらう。また今後どれほどの犠牲が拂はれることであらう。それは誠に悼ましいことには相違ないが、そこに新東亞建設に取つての拒みがたい生みの悩みがある。

これらの犠牲が大きければ大きいほど、これを礎石として、その上に輝かしい東亞の新秩序を建設することこそ、日支兩國の民族的使命でもあれば、人類的義務でもあることを私は確信するのである。(昭和十五年十一月)

パラフレニー

248

近頃大陸への旅行には、できるだけ飛行機を利用してゐるが、天候が悪いとやむを得ず汽車旅行をする。東京北京間を飛行機ならば九時間ばかりで飛べるのに、汽車だと三晝夜近くかかる。

殊に惨めなのは北京から大連まで歸つてから、天候が悪くて飛行機が飛ばないときである。直ぐに大連から汽車に乗れば、奉天で釜山行きの特急に間に合ふには合ふが、寝臺などはある筈もないから、展望車で一夜を明かすやうな、あはれなことになる。

私はいまだ嘗つて飛行機で難航した経験がないから、飛行機旅行ほど快適なものはないと思つてゐるが、それにしても多少の悪天候には影響されない程度に、飛行機が確實な交通機関になる日が、一日も速く到来することを切望する。それは専ら無線標識、無線通信などに關する電氣工學、今後の發達に期待される。

やはり大連で飛行機から卸されて、大陸をごとごとと汽車に揺られてゐたときのことである。

列車備付の書物を引張り出して讀んでみると、三宅正太郎さんの隨筆集『嘘のゆくへ』の中に、つぎのやうな文句があるのが、ひどく私の興味を惹いた。

『左翼右翼の精神は天を畏れざる無反省の心に宿る。精神病者の初期の症状は反省力を喪失することだといはれる。しかりとすれば日本は今あまりに多くの精神病初期の患者に悩まされてゐる譯だ』

これは某大學の學生の、謙虚の精神を失つた不謹慎な態度に、憤慨された三宅さんの抗議であるが、それをかうした極めて穩かな言葉で表現してゐる三宅さんの態度にも、私は心を惹かれて、そつと自分を『反省』して見た。

東京へ歸つてから、役所の食堂でその話をすると、醫學者である私の同僚のひとり、さういふ精神病患者のことをパラフレニー（偏執狂）といふのだ、と教へてくれた。さういはれて見ると、三宅さんの歎いてゐる通り、今のわが國には輕重の違ひこそあれ、パラフレニーがあまりにも多いのではないか、といふやうな氣がする。

アレキシス・カレル博士の『人間』といふ書物を見ると、米國の病院には入院してゐる精神病患者の數が、そのほかの總べての種類の患者の總計よりも、遙に多いのがあると書かれてゐる。

249

精神病患者の中にも、さまざまの種類があると思ふが、米國といふ國柄からいつて、その中には定めし澤山のパラフレニー患者があることと考へられる。

カレル博士はそれを醫學が發達するのに反比例して、人間の精神力が消耗してゆく證據だ、と説いてゐる。私は醫學の門外漢であるが、パラフレニーは精神力が消耗したばかりでなく、それがある一點に集中された結果、平衡を失した特異精神症狀ではないのかしら、などと素人診斷をしてゐる。

ところが十一月のある日、私は母校である第一高等學校の全寮晚餐會に、先輩として招待されて、短いスピーチをした。その中で私はこんな意味のことを話した。

『知識はそれがいかほど豊富であらうとも、信念によつて統一されるのでなければ、殆ど無意味、無價値である。世の中に正しく強く生きてゆくためには、無限大の信念が必要なのは、私が大學を出て以來二十四年の體驗である。高等學校三年の生活はこの信念を養ふために、絶好の機會である。大いに知識を攝取すると同時に、また大いに信念を涵養されたい』

そんなことを話して家へ歸つてから、私はふつとパラフレニーのことを思ひ出した。天才と狂人とは紙一重の違ひだといはれてゐる通り、偉大なる信念の士と偉大なるパラフレニー患者とも

紙一重かも知れない。要は精神状態が平衡を保つてゐるか、否かの問題だ。

私はヒットラーの『わが闘争』を読んで、それが偉大なる獨斷の書であり、偉大なる信念の書であるのに、感歎すると同時に、その文字通り拔山蓋世の信念を、心から羨しく思つたものであるが、これは軽々しく感心してゐる場合ではない。

だからといつて、私はヒットラーをパラフレニーではないか、などと疑ふわけでは毛頭ないが、少くとも今の青年に信念だけを鼓吹するのは、非常に危険なことではないか、といふことが反省される。誤つて盲目的な信念に偏執された日には、駟馬もなほ及ばないからである。

そこで思ひ出すのは三宅さんの、天を畏れず人を怖れざる無反省の心、といふ言葉である。今の世に偉大なる信念の必要なことは、なにほど強調されても足りりとしなうとは思ふが、それはどこまでも謙虚な心に宿つた信念であらねばならない。心から天を畏れ人を怖れる謙虚さである。今から十年ばかり前に、新潟縣の方で私は自分の全生命を打込む覺悟で、ある難工事に従事したことがある。工事を起工するにあつて、所員一同の前に決死の覺悟を披瀝した私の兩眼からは、珊々として涙が溢れ、また首尾よく工事を竣工したときには、私と所員一同とは些やかな祝杯を擧げながら、嬉し泣きに泣いた。

隨

そのとき以來私は機會あるごとに、世にも謙虚な心を以て神前に頼づくのである。そして自分がこの世に正しく強く生きるために、神明の加護を祈るのである。

想

この世に正しく強く生きるためには、不退轉の信念が必要だ。そのためには飽くまでも強い信念を養はなければならぬとは思ふが、それと同時に己れを空しうする謙虚な心だけは、いつまでも失ひたくないと念じてゐる。

あの夜私のスピーチを聞いた母校の青年が、私の眞意を誤解した結果、謙虚さを伴はない信念に奔つて、パラフレニーに陥るやうなことがなければ誠に幸である。(昭和十六年一月)

すて石

砂上樓閣といふ言葉が、わが國では比喩的な意味に用ひられる。いつ崩壊するかも知れない不安定な建築を意味するやうであるが、科學的解析によれば、砂上樓閣必ずしも不安定な建築とはかりは即斷されない。

要は土臺がしつかりしてゐるか否かの問題である。たとひ樓閣といはれるほどではなくとも、粗末な小さな建築にさへ、なくてはならないものは土臺である。その土臺のなにかぎり、いかに堅牢な地盤の上の建築といへども絶対の安定性がなく、これに反して堅固な土臺さへ設けられるならば、素人眼にはいかに危なつかしく見られる砂の上にさへ、大厦高樓を建築し得るのが今日の科學であり、技術である。

すて石
例へば東京の地盤は、科學的にいへば砂よりもはるかに軟弱な粘土質地盤であるが、これに數千本のコンクリート杭を打込んで、堅牢な基礎工事を施したればこそ、東京驛だとか、帝國議會

議事堂だとかのやうな大厦高樓が、立派に建築されたのである。

それと全く同様に、河海の水中に構築される各種の構造物にしても、幾多の苦心がその基礎に拂はれてゐる。大阪港や名古屋港のやうな泥土質地盤の海底にさへ、防波堤、岸壁、その他の重い構造物が構築され得るのは、偏にそれら基礎工事の賜である。

河海構造物の基礎としては、すて石を使用する場合が非常に多い。例へば大海の波浪を防ぐための防波堤は、まづ海底に多量のすて石をして基礎を造り、その上にコンクリート方塊だとか、函塊だとかを載せるのであるが、このすて石こそは決して無駄に捨てられたものではなくして、そのひとつひとつが、堅牢な防波堤構造のために、なくてはならない貴重な基礎なのだ。

陸上建築物の土臺にしても、河海構造物のすて石にしても、永世地上に姿を表はし、水面に浮びあがる機會はない。もしもさやうな機會があるとすれば、それはその建築物や構造物が崩壊したときにかぎるのである。

永世姿を表はさず、その存在さへも認められない土臺やすて石こそは、文字通り縁の下の力持であつて、誠に氣の毒な役目ではあるが、その損な役廻りを勤めるものがなければ、立派な建築物も、堅牢な構造物も成立し得ないことを思へば、たとひ一個のすて石といへども立派に意義づ

けられなければならないし、また無駄に捨てられてはならないのである。

それは社會や國家についても同様である。堅牢な土臺や、十分のすて石のないかぎり、社會、國家の上部構造は決して營まれない。それこそ眞の砂上樓閣にすぎないのだ。

建築物や構造物の上部構造になりたいものばかりが徒らに多く、甘んじて土臺やすて石になるものがない社會や國家は、健全性と堅實性とのない社會であり、國家であると私は思ふ。

しかるにわが國の現状は、社會のために土臺となり、國家のためにすて石となることに甘んずるものが、あまりにもすくないことを私は心から遺憾とするものである。

それを私は自由主義思想にもとづく立身出世主義の害毒だと思ふ。私の少年時代を回顧して見ても、河村瑞賢がどうしたとか、古河市兵衛がかうしたとか、といったやうないはゆる立志傳によつて、立身出世主義を少年に鼓吹することはあつても、犠牲的奉公精神を鼓舞するやうな少年教育は、殆ど閑却されてゐたのではないかとさへ思ふ。

その結果は功名精神のみ徒らに横溢して、すて石精神が地を拂ふにいたつたのだ。官界を見ても、民間を見ても、功名精神だけが看取されてならない。

個人の發展を前提としてのみ社會の發展を思念する自由主義社會は、立身出世の觀念を個人道

隨

徳の基礎とするが故に、社會のために土臺となり、すて石となるものが次第に跡を斷つのを當然とする。

想

これに反して社會の繁榮を前提としてのみ個人の繁榮を意欲する全體主義社會は、犠牲奉公の觀念を社會道德の基礎とするが故に、甘んじて社會のために土臺となり、進んで國家のためにすて石となるものの輩出が期待される。

ただしそれには土臺やすて石の意義が、社會により個人によつて正しく認識され尊重され、ただひとつの小さなすて石といへども、決して無駄にしないところに、社會の指導精神が置かれなければならぬ。

およそ立志傳といふものは、個人の努力を推賞する意味においてのみ尊重さるべきだと思ふ。して見れば個人の繁榮を目標とする功名精神の鼓吹だけが立志傳の唯一の哲理であるべきではなく、社會の發展を目標とするすて石精神の鼓舞にも、また立志傳の哲理が成立しなければならぬはずである。

すて石精神の貧困からわが國を救ふといふことに、日本民族國家を強力に基礎づけるための、大きなテーマがあることを私は痛感してやまない。(昭和十六年三月)

石と兵隊

私の家では昨年まだ寒くならないうちに、茶の間へ疊半枚の炬燵を作つた。この冬は木炭も瓦斯も不足するだらうことが懸念されたからである。お蔭で僅の木炭と炭團とで、七人の家族が暖を取ることが出来る。

ドイツのオーフェン、ロシアのペーチカ、朝鮮の溫突といったやうに、民族獨特の煖房法のひとつに數へられるわが國の炬燵は、われらの祖先によつてなされた獨創的考案の中で、最も優れたもののひとつだと私は思ふ。

この冬は私も瓦斯ストーブを點けて、書齋で勉強することをやめて、茶の間の炬燵で讀書をしたり、執筆をしたりすることにしてゐるが、そこにわが國の炬燵の優れた特徴がある。

近頃はラヂオ放送が面白くないといふ聲を、よく耳にするが、それでも私は最近の演藝放送から、何とかしちや嫌よといふやうな頹廢的な歌謡曲だとか、低級な漫才だとか、影を潛めたこ

とを、何よりも愉快に思つてゐる。

それにしても何か勉強でもしようと思ふときには、茶の間にあるラヂオが耳障りになるので、いつも聞えるか聞えない程度の、低音に調整してしまふのであるが、ときには讀書をやめ、執筆の手を休めてラヂオの講演や演藝放送に耳を傾けることがある。

去る一月七日の夜の、ラヂオ新年大會の中継放送などは、近頃私が面白く聞いた放送のひとつである。その中でも石と兵隊といふ浪曲が、何よりも強く私の胸を打つた。

家が貧しいために、慰問袋の中へ何ひとつ買つて入れられない少年が、宮城二重橋前の玉砂利をひとつ拾つて来て、日本國民の忠誠の精神の宿つたこの玉砂利を身につけて、御國のために奮戦して頂きたい、そして無事凱旋の曉にはこれを宮城前にお返しして頂きたい、といふ意味の手紙を添へて贈るといふのが、その浪曲の荒筋だつた。

それを聞いてゐる私の兩眼から熱い涙がとめ度もなく流れた。萬邦無比のわが國體の尊嚴と光榮とに對する感激の涙である。生を皇國に享けたことに對する、かぎりなき歡喜の涙である。

さうした國民的熱情こそは、世にも尊い感情だと私は思ふ。それによつて、そしてそれによつてのみ國家の生命力は、哺まれるからである。(昭和十六年一月)

科學者の夢

私は科學の創造力の無限性を確信してゐる。十九世紀から二十世紀にかけてなされた劃期的な科學上の發見や、技術上の發明は、殆ど枚擧に遑がないが、しかも今後どれだけの驚異的な發見や發明が出現するかは、全く豫想することもできない。

ナチス・ドイツが宣言してゐるやうに、いかなる難事業も科學的論據から割り出した斷乎たる決意があるかぎり、結局これを實行し、完成することができるのである。従つて科學者の夢といふものは、それが確實な科學的根據に立脚するかぎり、いつかは必ず實現し得べきものだ。

手ぢかな話が、支那の黄河は五千年漢民族の災禍と咀はれ、難治無比と謳はれて來た河川であるが、現代科學はこれを治めて洪水の憂患を斷つと同時に、灌漑、發電、舟航のために利用し、昨日までの禍の黄河を、今日は恵みの黄河に變へることを決して困難としないのである。

陝西、山西兩省の境を北から南に流れる黄河の部分は、流量が多く落差が大きく、發電水力と

して利用するに適する。もしこの部分に幾つかの堰堤を設けて発電するとなると、その總出力は數百萬キロに達するから、北支、蒙疆一帶の産業が劃期的に變革されるのは、火を睹るよりも明かである。

今日の科學でゴビの沙漠に雨を降らし、沙漠を耕地化する方法はないか、といふやうな質問をかけられることがしばしばあるが、それは一應未來の夢としておいて、黄河の洪水を貯水池に貯へて、さしあたりオールドスの沙漠に灌漑し、これを綠化することならば、今日の科學でも決して不可能ではない。

最近アメリカの某教授が石炭を粉末にして、鐵管を使つて水で輸送する研究を完成したと傳へられるが、實は大同炭七〇〇軒の輸送に、水送法を採用しようかといふことは、日本でも昨年あたりから研究中だつた。大同炭は自然勾配を利用するに、最も有利な位置にあるからである。

石炭の水送法が成功すると、鐵道輸送などは比較にならないほど、運搬費が節減されるので、石炭輸送に一大革新が行はれることになるが、しかしこんなことは實は夢でも何でもなし。今日の科學に立脚して、明日からでも實行にとりかかり得る現實の問題である。

多少科學者の夢らしいところを披露すると、まづ朝鮮海峡の海底隧道がある。關門海峡の海底

隧道に成功したからといつて、直ぐにも朝鮮海峡に成功すると考へるのは早計だが、これなどもいつかは實現する日があると期待してよいと思ふ。

つぎに北部日本海の沿岸地方の氣温を高める方法はないかといふ話がある。ヨーロッパではロンドンでも、ベルリンでも、パリでも、丁度樺太の日ソ國境線附近に相當する緯度のところに、世界最大の都會が營まれてゐる。それはヨーロッパがメキシコ灣流に暖められてゐるからである。日本近海も黒潮によつて暖められてゐるのだから、ベーリング海峡を閉塞して親潮の南下を堰きとめさへすれば、北部日本海の氣温は俄然として上昇し、それと同時に太平洋への流入を阻まれた寒流は澎湃として大西洋に集中する結果、ロンドンもパリも、忽ちにして氷原と化するだらうと考へられる。

ベーリング海峡は比較的淺く、これを閉塞するのは甚だしく困難でないらしいが、ただ閉塞しただけでは能がないから、そこに巨大な寒流調節用の水門を設け、その水門の管理權を日本が握るとなると、日本の吐ひとつで自由自在に大西洋を寒くも、暖くもすることができるといふわけで、誠に好都合なことになるが、こんな結構な夢は一日も速く實現して見たいやうな氣がする。

(昭和十五年九月)

時代に直言す

今から四年前に勃發した支那事變を處理すると同時に、今日全世界を擧げて直面してゐる歴史的な一大轉換期に對處して、國家の興隆と民族の發展とを策するために、わが國が目標としてゐる東亞新秩序の建設、若しくは東亞共榮圈の確立が、わが國に取つて有史以來の大事業であるのは、今さらいふまでもない。

昨年十一月帝國は支那國民政府との間に國交調整條約を締結して、東亞新秩序の建設は漸く第一段階に到達した觀があるが、それは僅に第一段階を踏んだといふだけであつて、問題は寧ろ今後にあると考へなければならぬ。

實に新東亞建設の聖業は、日本民族の實踐力において、またその責任において完遂されなければならぬ歴史的な大事業であるが、そのためには國家の總力、國民の總力を擧げて集中動員することを、絶對に必要とする。これ即ち國內新體制の確立を急務とする所以である。

新體制についてはさまざまの理念を樹てることができると思ふが、一億國民を擧げて 天皇に歸一し奉ることを肇國精神とするわが國の新體制は、日本的全體主義を理念とする強靱な協力體制でなければならぬと私は思ふ。

これによつて始めて國防の面においても、政治の面においても、また經濟産業の面においても、或はまた國民精神の面においても、國家の總力が最も有効に發揮されるのである。それではそのためにはいかなる指導原理が必要であるか。

道は近きにあり、これを遠きに求む、といふ諺があるが、むづかしい言葉を使つて新體制を理念づけるまでもなく、案外手ぢかなところに道は開けてゐるのかも知れない。さういふ見方から、私は二、三の思ひつきを述べて見たいと思ふ。

支那や滿洲へ行くと、一臺の荷車を牛と馬とが並んで仲よく引張つてゐるのがある。或はまた馬と驢馬とが引張つてゐるものもある。それを見て私はつくづく感ずるのであるが、たとひ車を曳く方に違ひがあつても、牛と馬とが力を戮せてひとつの方向に車を曳けば、車はいやでもその方向に動いて行く。

これに反していかに遅しい駿馬であつても、二頭の馬が反對の方向に車を引張つたのでは車

は少しも動かない。國家總力の動員發揮といふことも、結局これと同じことである。國家總力を構成する個々の力が、たとひどれほど強力なものであつても、その間に協力がなく、綜合がない場合には、これを有効に動員發揮することはできない。

最近米國から歸朝したある人の感想に、日本へ歸つて來て特に眼につくことは、誰を見ても喧嘩腰で、いらいらした顔つきをしてゐる、といつてゐるが、確に日本民族には協力精神よりも、鬭争意識の方が強いのではないかと思はれる。それがわが國では個人道徳は發達しても、公共道徳の發達しない有力な原因ではないかと思ふが、たとひ日本民族の特徴がどこにあるにもせよ、今日は日本民族を擧げて一億一心の強靱なる協力體制を結成しなければならぬ秋である。

それについて最近に讀んだ米國のテオドル・アベル教授の『ヒットラーとその運動』といふ書物に、ナチス黨員、特に初期のナチス運動者が極めて強靱な協力精神によつて結合されてゐる真相が詳しく描かれてゐるのに、私は心を打たれたものである。

それは觀念的な協力精神などといふものではなくして、血のにじむやうな同志意識である。どうしてさやうな眞剣な同志意識が養はれたのであるかといへば、彼等の大多數は第一次世界大戰當時、西部戦線において祖國ドイツのために、身命を賭して鬭つた連中である。

ヒットラーもその一人であるが、彼等は數年に互つて塹壕生活の辛苦をともにした同志である。塹壕の中においては個人は完全に抹殺されて、そこにあるものは、ただドイツ國民であり、ドイツ民族である。彼等の間に眞剣な同志意識が生れたのは當然の歸結でなければならない。そこにナチス運動の強味がある。

大陸の現地は無論のこと、國內においても日本民族の間に強靱な協力精神、同志意識の昂揚されること、何よりも急務であることを痛感するにつけても、私は『塹壕意識によつて』をひとつのスローガンとして強調したのである。

それによつて始めて、國力の全體主義的發揮が期待される。全體主義といふと、ドイツやイタリアの眞似だと考へる人があるかも知れないが、君民一如を以て建國精神とするわが國こそ、神ながらの全體主義國家でなければならないと、私は考へるものである。

つぎに私がアベル教授の『ヒットラーとその運動』によつて教へられた今ひとつの點は、ヒットラーとその同志とが、ドイツ國民の偉大さといふことを、力強く鼓吹して、國民の自尊心を煽り、民族の誇に訴へてゐることである。

およそ個人であつても、民族であつても、自分を信ずる、自分を尊敬するといふのでないかぎ

りは、他の個人なり、民族なりの信用や尊敬は、斷じてかち得られない。

東亞新秩序は、わが國の獨力では建設し得られないものである。また東亞共榮圏は數億の東亞民族を包容しなければならぬものである。わが國がその推進力となり、これらの異民族と協力提携して、新秩序を建設し、共榮圏を確立する場合において、わが國民に堅持されなければならぬものは、民族の誇でなければならぬと私は思ふ。

しかもこの意味において甚だ遺憾なことには、わが國民には民族の名譽のために行動する、民族の責任において行動する、そしてその點に民族の誇を感じるといふ氣持が、比較的稀薄なのではないかと考へられる。

だからわが國には『旅の恥は掻き捨て』といつたやうな、不名譽な、無責任な諺が昔からあるのである。日本民族がかやうな行動を執るかぎり、それは東亞民族の盟主たる名譽と責任とを自ら拋棄するものである。

大陸の異民族と協力提携して、新秩序を建設し、共榮圏を確立するといふことは、日本民族に取つては最初の試煉である。このために事ごとに痛感されることは、國民の民族的訓練の不足である。

この缺陷を補ふために、新東亞建設の各部門を擔當する中堅國民の訓練を目的として、政府は中央練成所の設置を計畫してゐるが、大陸の産業建設のために進出する日本國民のうちに、一人でも民族の名譽を蹂躪し、民族の責任を無視して顧みないやうな人物があるとすれば、それはわが國の國策的使命の遂行に、なんら貢獻しないばかりでなく、却つてこれに逆行し、これを妨害するものである。

大陸の現地において、さうした實例が極めて多いのを目撃するにつけても、私はわが國民に民族的誇の堅持を求めることが、何よりも急務であることを信ずる。

日本民族は決してドイツ民族に劣るところのない優秀民族のひとつである。『旅の恥は掻き捨て』といふやうな諺は、光榮ある日本民族の誇のために、速に抹殺されなければならないものである。

東亞新秩序の建設といふ歴史的聖業に使命づけられた日本民族の實踐要領は、『日本人の名譽のために』といふスローガンでなければならぬからである。

國內新體制の確立を目標として、切に國民生活の自肅自戒が要望されてゐる。贅澤をしてはいけぬ、濫費をしてはいけぬ、買溜めや賣惜みをしてはいけぬ、闇取引をしてはいけぬ。

かういつたやうなスローガンは、今では國民の常識となつてゐる。無論、贅澤や濫費や闇取引をしてよいといふ理窟はひとつもない。それは國民の自肅自戒に待つと同時に、法令の力によつてこれを強制することが、戦時體制下の國家の要請ではあるが、さうした枝葉末節の方法論に固執するよりは、大乗的な民族指導原理を確立することの方が、先決問題ではないかと私は思ふ。現在のわが國が必要とするものは、消極的な抑制方策ではなくして、積極的な建設方策でなければならぬ。それがわが國家總力を精神的にも物質的にも、最も有効に昂揚發揮せしめる所以だからである。

私は先月北支那へ行つて、石徳線一八〇軒の鐵道開通式に參列した。これは事變以來最初に建設された、北支産業開發上、最も重要な鐵道であるが、その建設に際してはこれが警備にあたつた高崎部隊の加藤大尉以下、三十餘名の尊い殉國の英靈が人柱となつてゐるのである。

その歸りに、私は山東省の炭礦を二、三視察したが、それらの炭礦は山東省の中部山岳地帯に接近してゐるために、治安がよろしくない。八路軍の襲撃によつて、礦山警備隊の殉職や、支那人従業員の拉致が、今なほ繰返されてゐるのであるが、さやうな礦山において身邊の危険を顧みることなく、石炭の増産開發のために、必死の努力を捧げてゐる炭礦業者に對して、私は無條件

に頭がさがるのである。

東亞新秩序建設のためには、大陸のいたるところに、かやうな軍官民一致の眞剣な努力が注がれてゐるのである。

私はこの旅行から、先程お話しした『塹壕意識によつて』と『日本人の名譽のために』といふ二つのスローガンを携へて歸つたものである。そしてそれをこの機會に、すべての國民に訴へたいと思ふ。(昭和十六年三月)

發表の時と場所

大陸建設の現状	昭和十四年	十月	雄 辯
大陸資源の開発	十五年	一月	雄 辯
大陸經濟建設の課題	十五年	六月	科學知識
大陸の交通問題	十五年	九月	AK放送
東亞經濟協同體論	十五年	十二月	技術評論
東亞共榮圈と日本技術	十六年	三月	科學主義工業
興亞建設の水利問題	十四年	八月	水利と土木
天津の洪水	十四年	八月	東京朝日新聞
黄河の氾濫	十四年	八月	現代

大陸の水利建設
大陸の水道事業

昭和十五年 十月
十四年 七月

東京日日新聞
水道協會雜誌

興亞技術の根本原理

十四年 二月

技術大會講演 A K 中繼

新東亞の建設と技術

十四年 三月

電氣學會雜誌

興亞技術の三つの性格

十五年 三月

逓信協會雜誌

新東亞の建設と技術の使命

十五年 四月

電氣協會關東支部總會講演

興亞日本の技術者に望む

十五年 一月

水道協會雜誌

民族文化の創造

十五年 五月

全 人

民族の誇

十六年 四月

現 代

偉大なる専門家

十六年 五月

支 那

山西雜感

十五年 十月

現地報告

車中雜感

十五年 十月

サンデー毎日

上海の一夜

十五年十一月

支 那

バラフレニー

十六年 一月

文藝春秋

す て 石

十六年 三月

週刊朝日

石と兵隊

十六年 一月

都 新聞

科學者の夢

十五年 九月

雄 辯

時代に直言す

十六年 三月

A K 放送

昭和十六年十二月八日 印刷
昭和十六年十二月十三日 第一刷發行

大陸建設の課題

定價壹圓五十錢

著者 宮本武之輔

東京市神田區一ツ橋二丁目三番地

發行者 岩波茂雄

東京市牛込區改代町二十四番地

印刷者 田中末吉

東京市神田區一ツ橋二丁目三番地

發行所 岩波書店

電話九段(33)一八七番(4)
振替口座東京二六二四〇番
會員番號一〇二〇三七號

配給元

東京市神田區
淡路町二丁目九番地

日本出版配給株式會社

本製中田 刷印社想理

。すまし致替取お。すまし願出申御接直らたしまりあが品な全完不第丁亂・丁落

906

192

宮本武之輔著

現代技術の課題

一B 一五〇六 三四〇頁

科學及び技術の理念が全國民によつて正しく把握される事は、刻下の急務であり、本書を江湖におくる所以である

大陸建設の課題

一B 一五〇六 二八〇頁

大陸建設の現状、大陸資源の開発、大陸水利問題等の諸論策は大陸建設の實體を把握する上に資する事多大であらう

鐵筋コンクリート

小四六 二四二頁

鐵筋コンクリートの概念を得るにも、又諸計算・設計圖表等直ちに利用するにも、至便のハンドブックである

鋼矢板工法

小四六 二〇八頁

永年鋼矢板の實地作業に従ひ、斯界の權威たる著者が、材料・施工・計算・設計等の各部門を總括された好著

岩波書店刊行

終

1.50